

# 1950年代の日本におけるブルータリズムのローカライゼーション：日本のブルータリズムの建築事例

## 研究動機

マイクラフトで空港を建てていた時、そのビルが「ブルータリズムっぽい」と母に言われて興味を持った。

## 先行研究

1950年代以降にイングランドで誕生したブルータリズムが、トルコ、イスタンブールにおいてどのように受容、変容し、独自のローカライゼーションを(地域化)を遂げたのかを明らかにしている。具体的には、グローバルなブルータリズムの基本原則①「記憶に残るイメージの創出」②「構造の明快な露出」③「素材のありのままの価値提示」が、イスタンブールの歴史的背景や地域的、文化的コード、そして地元資源の利用といった要素と結びつき、独自の建築表現に昇華している点が示された。

この研究では、1960～80年のイスタンブールにおけるブルータリズムやその影響を受けた建物を文献レビュー、歴史的資料、既存の写真資料などを基に網羅的に調査し、15棟候補を抽出し、各建物がレイナーバンハムが提唱する3つの原則(「記憶に残るイメージ」、「構造の露出」「素材のありのままの提示」)をどの程度満たしているかを評価している。

## 定義ブルータリズムとは？

1950年代から1970年代にかけて、世界で流行した建築様式。素材を加工せずに使用したり、構造を露出させたりして、印象を強くする様式である。現在では、ブルータリズムは「重厚」や、「コンクリート打ちっ放し」といったイメージがついているが、もともとの定義ではそうであったわけではない。今回は、現在の意味ではなく、本来の定義に基づいて話す。

## 先行研究の問題点・課題

Özlem BALCI ÖZTÜRK and Oya Şenyurt, "Localization of Brutalist Architecture in Post-War Turkey: Three Unique Examples from Istanbul" Architecture, Civil Engineering, Environment, XVII, Iss. 3 (Sep. 2024), pp.1 - 23  
①ブルータリズム建築はイギリスで誕生し、その後、さまざまな国へと広がっていった。しかし、日本におけるブルータリズム建築については、レイナー・バンハムが提唱した3つの評価基準——「記憶に残るイメージ」「構造の露出」「素材のありのままの提示」——に基づいた体系的な研究が十分に行われていない。そのため、ブルータリズムの定義や評価に混乱が生じているのが現状である。  
②1950年代初期の様式の思想や表現意図と「重厚な」「荒々しい」など後付けで評価されたものが当初の思想として混同してしまっている。

Yat Shun Juliana Kei, "New Brutalism and the Myth of Japan"Mass Media and the International Spread of Post-War Architecture 4 (2019), pp242-255  
①形式分析の偏り  
日本のブルータリズム建築については、素材（コンクリート）や構造の露出といった「形式的特徴」に焦点を当てる研究が多く、それがなぜ、どのように地域の文化や歴史、精神性と結びついたかの分析は限定的。  
②東京や著名建築家に集中した分析  
丹下健三や前川國男などの中心的建築家に注目した研究が多く、地方都市や他の建築家の作品を含めた「地域性」の視点が不足している。  
③写真資料の言説分析の不足  
建築そのものの分析はされていても、当時の\*\*写真が建築をどう「語っていたのか」「意味づけていたのか」\*\*に注目する研究は少なく、視覚的表象の力を軽視している面がある。

大問：・1950年代日本におけるブルータリズム建築は、どのようにレイナー・バンハムの三原則を反映していたのか？  
・1950年代日本におけるブルータリズム建築は、西洋的形式の受容にとどまらず、日本固有の地域的・文化的特性をどのように取り込んだのか？  
→ 国際的な理論をローカルに照らし、実践の実態を明らかにする。

小問：・Q1：1950年代に建てられた日本の建築の中で、どの作品がブルータリズムとして言及・記録されてきたか？（対象作品の抽出）  
・Q2：写真資料において、それらの建築は「構造の露出」「素材のありのままの提示」「記憶に残るイメージ」をどのように表現しているか？（写真表現における三原則の可視化）  
・Q3：当時の建築メディアや批評において、ブルータリズム建築はどのように評価・語られていたか？  
また、それは後年の印象や語りとうどう異なるか？（初期の受容と後年の解釈の差異）  
・Q4：日本の文脈（素材、気候、文化的背景）はブルータリズムの表現にどう影響していたか？（ローカライゼーションの視点）

## 調査概要

期間：2025年04月05日～04月06日  
場所：在宅  
対象：1950年代の日本におけるブルータリズム建築

1950年代日本におけるブルータリズム建築が、国際的な理論（レイナー・バンハムの三原則）をいかに地域的・文化的な文脈の中で受容・変容させたかという「ローカライゼーション※1の実態」を明らかにするため、1950年代に建てられた日本国内のブルータリズム建築における写真表象・建築批評・空間表現について、日本国内のブルータリズム建築をレイナー・バンハムが提示した三原則（「記憶に残るイメージ」「構造の露出」「素材のありのままの提示」）に基づき、評価する。  
また、その建築作品にローカライゼーションが見られたか、建築的な基本情報、設計者の言説・批評、地域文脈との接続について文献レビューをし、ローカライゼーションが見られたかを評価する。

※1 特定の地域や文化に適応した建築デザインや施工プロセスを指します。このプロセスは、地域の特性やニーズに基づいて建物や空間を設計・施工すること

# 副題

発表者氏名：カスバートジェイミ空  
所属・学年：立命館中学校1年

協働研究者：館岡浩志  
京都工芸繊維大学4年 安達瑠夏  
同志社大学大学院博士1年 日野阜汰朗

## 結果

○...当てはまる  
△...部分的に当てはまる  
×...当てはまらない

| 作品番号 | レイナー・バンハムが提示した三原則 |       |           | ローカライゼーション |
|------|-------------------|-------|-----------|------------|
|      | 素材のありのままの提示       | 構造の露出 | 記憶に残るイメージ |            |
| 1    | ○                 | ○     | ○         | ○          |
| 2    | ○                 | ○     | ○         | △          |
| 3    | △                 | ×     | ○         | △          |
| 4    | ○                 | ○     | △         | ○          |
| 5    | ×                 | ×     | ×         | △          |
| 6    | N/A               | N/A   | N/A       | N/A        |
| 7    | N/A               | N/A   | N/A       | N/A        |
| 8    | ○                 | ○     | ×         | ○          |
| 9    | ○                 | ○     | ○         | △          |
| 10   | △                 | △     | ○         | △          |
| 11   | △                 | ○     | ○         | ○          |
| 12   | ○                 | ○     | ○         | △          |
| 13   | △                 | ○     | ○         | ○          |
| 14   | ○                 | ○     | ○         | ○          |
| 15   | ○                 | ○     | ○         | ○          |
| 16   | △                 | ○     | △         | ×          |
| 17   | ○                 | ○     | ○         | ○          |



## 結論

- ・今治市公会堂は、コンクリート材に切れ込みを入れ、加工しているようにみえたため、ブルータリズムと呼べるか曖昧。
- ・日本におけるブルータリズム建築には、日本古来の建築による影響がみられた。例えば、香川県庁舎である。香川県庁舎は、日本の寺のように梁を突き出して、ベランダを支えているところが特徴的。また、浦邸では外壁に木材が使われており、日本建築とブルータリズムを融合させたような建築が特徴となっている。
- ・京都会館では、モダニズムとの関係も見える。例えばピロティや、テラスなどがある。しかし、屋根の下の梁や柱が露出しているところから、ブルータリズムとも言える。奥にはレンガの箱のようなものが見える。これは近辺の京セラ美術館などの建造物に合わせた結果であるのか。
- ・東京文化会館の天井のスラブがカーブし、上方向に流れる形となっているが、そこに大きな穴が見られる。この穴からの視線で見える部分には、桜並木がありました。これは花見用に開けられた穴なのか疑問に思う。
- ・倉敷市庁舎では、窓の部分に細い柱があり、その間に細い棒があるが、それは竹を示しており、細い棒はその葉なのではないか。

## 本調査の成果・独自性・新規性

日本におけるブルータリズム建築について、レイナー・バンハムが提唱した3つの評価基準——「記憶に残るイメージ」「構造の露出」「素材のありのままの提示」——に基づいた体系的な研究を行うことができた点。

## 本調査の限界・反省点

- ・本調査では建築図面の収集に十分な時間を確保できず、空間構成や構造の詳細な分析には限りがあった。
- ・取り扱った資料に一定の偏りが見られたため、多角的な視点からの検討には課題が残った。
- ・丹下健三や前川國男といった著名な建築家の作品にとどまってしまった。

## 今後の見通しと展望

- ・次は、1960年代以降の日本のブルータリズム建築を対象に研究したい。
- ・日本だけでなく、モロッコなどのブルータリズム建築をどのようにその国が影響され、地域性を取り込んでいったのか、同じ調査方法で調べたい。
- ・建築模型を作った上で、調査分析をしたい。
- ・今後の課題として、丹下健三や前川國男といった著名な建築家の作品にとどまらず、地方都市に建てられた建築や、他の建築家によるブルータリズム建築についても調査を広げていく必要があると感じている。

## 参考文献・URL一覧

参考文献  
・磯達雄『日本のブルータリズム建築』トゥーヴァージズ、2023年、1-144頁  
・ロベルト・コンテ、ステファノ・ベレゴ（石田亜矢子訳）『イタリアのブルータリズム建築』グラフィック社、2024年、1-200頁  
・Özlem BALCI ÖZTÜRK and Oya Şenyurt, "Localization of Brutalist Architecture in Post-War Turkey: Three Unique Examples from Istanbul" Architecture, Civil Engineering, Environment, XVII, Iss. 3 (Sep. 2024), pp.1 - 23  
・島田桃香、小林克弘『ブルータリズム建築の表現手法に関する分析および設計提』首都大学東京大学院 都市環境科学研究所 建築学域平成30年度修士論文(2018), pp03-08  
・Yat Shun Juliana Kei, "New Brutalism and the Myth of Japan"Mass Media and the International Spread of Post-War Architecture 4 (2019), pp242-255  
URL  
・SOS Brutalism : <https://www.sosbrutalism.org/>  
・ARTnews JAPAN : <https://artnewsjapan.com/article/20973>  
・Pen : with new attitude : <https://www.pen-online.jp/article/010730.html>

